

第 11 講 第一次世界大戦への道

原因・結果・影響に関して

現代人にとり多くの教訓を含んでいる

ヨーロッパの自殺

7000 万人を動員

1000 万人が戦死

ドイツ 177 万人 フランス 136 万人 イギリス 91 万人
ロシア 170 万人 オーストリア 120 万人 イタリア 65 万人
アメリカ 13 万人

2200 万人が負傷

戦闘による犠牲者（フランスの場合：全動員兵中）

生存 29% 負傷 53% 戦死 14% 行方不明 4%

インフレ率

	フランス	イギリス	ドイツ
1915	110	70	80
1916	120	100	100
1917	180	110	150
1918	240	120	200

穀物生産の減少（オーストリアの場合）

	小麦（1913年 100）	ジャガイモ
1914	96	103
1915	72	84
1916	56	52
1917	48	0

ドイツの餓死者

1915	92,300
1916	124,600
1917	272,300
1918	309,200
合計	798,400

債権国から債務国へ

イギリス

戦前保有していた債権 195 億ドル

対米債務 42 億ドル

フランス

対米債務 30 億ドル

イタリア

16 億ドル

経済の衰退

工業生産

	ヨーロッパ	北アメリカ	アジア
1913	43%	26%	20%
1923	34%	32%	21%

ヨーロッパの凋落

ヨーロッパ諸国（ルーマニア・オーストリア＝ハンガリー・イタリア・ドイツ・フランス・ベルギー・イギリスの 9 カ国）の金準備喪失
2 億 8000 万ポンド

政府の崩壊

ロシア	ドイツ	オーストリア＝ハンガリー	トルコ
革命・銃殺	革命・亡命	亡命	革命

領土削減

ロシア：フィンランド・バルト 3 国・ブコビーナ・ベッサラビア・ポーランド

ドイツ：マルメディ・アルザス・ロレーヌ・シュレスヴィヒ・西プロイセン・海外領土

オーストリア：本体のみ

ハンガリー

トルコ

ブルガリア

国土の荒廃

特にロシアとフランス

飢餓の経験 1916－17 年の「かぶらの年」

自信の喪失

ニーチェとマルクス主義・シュペングラー (『西欧の没落』)

退廃的文化・危機神学

ファシズムに対する宥和政策の精神的土壌の形成

第1次世界大戦の原因

政治のゲーム化と道義性の欠如

一般的原因

- ① 政治指導者 ② 軍の官僚化 ③ 大衆化

政治指導者の心理

戦争はそれ程コストにならない：戦争は短期で終わり、それ程の損失を生ずるとは考えなかった

貪欲と脅し：相手の譲歩を引き出し、調整可能と考える

孤立への恐れ：同盟国を失うのではないかという懸念

虚勢：弱さを悟られまいとする・軍備の増強

中でもカイザーの責任

他国の指導者を扇動

緊張状態を生み出し、その中でドイツにとって有利な条件を得ようとする

不信と反ドイツ同盟の形成を結果

本人は戦争を恐れていたのに、好戦的な口調で世界に誤解を与えた他国の指導者に対する軽蔑的態度

イギリスのグレイ外相を「卑劣なペテン師グレイ」と呼んだり、「下等な行商人の群れなる英国人」と呼ぶ

その言動に硬と軟の揺れ幅が大きく、一貫性がない

危機を煽っておいて、危機が迫ると驚いて現実から逃避しようとする

軍事機構の肥大化

各国の参謀本部

軍事官僚に過ぎない

一度動き出したら政治指導者は軍をコントロールできなくなる

軍事上の理由と同盟国を失うことになると脅して、政治家の介入を排

除しようとする

戦前の計画通りにしか行動できない

＝柔軟な対応能力の欠如

ロシアの場合

サゾーフ（外相）：部分的動員を求める

参謀本部：専門的理由で拒否←ロシアの軍事機構の狂いを避ける
には総動員しかない

オーストリアの場合

ティッサの反対に対するベルヒトールトの反論：

「遅らせることによって軍事上の困難」が生じること、
「一撃を加えるべきこの好機に、我々が手をこまねいてやり
り過ぎてしまうことを、ドイツはとても理解してはくれない
だろう。」

ドイツの場合

カイザーが英仏の中立を確保する為に、ドイツ軍の東方への攻撃
を主張したとき

モルトケ：「それはなりません。何百万の兵からなる部隊の進
撃は・・・多年にわたる労苦の結果なのです。一旦計画さ
れてしまえば、恐らく変更できるものではありません。」

カイザーの皮肉：「貴官の叔父上だったら違う答えをしたろう
に。」

軍の規模が巨大化しすぎて柔軟性を失ってしまった

緒戦で各国は 600 万人を動員

その軍隊・機構は長年にわたって一つの計画・一つの目標・一つの行
動を実行する為に組織され、訓練され、計画されてきた。

それ以外の行動は取れない。

容易に変更できるものではない

専門家という技術者集団（職業軍人）が形成され、

政治家などの外部の干渉を排除し、

そのコントロールを嫌う

過去の経験に即した硬直した作戦思想

攻撃第一主義＝軍人の美意識

日露戦争で機関銃が防衛側に圧倒的に有利である事を証明
していたにもかかわらず

新技術に対する嫌悪と無知

戦車や潜水艦、毒ガスや航空機などの革命的兵器が登場して
いたのにその運用を嫌い、また適切な運用法を知らなかった
歩兵による突撃とカンナエ型の全周包囲しか考えなかった
←クラウゼヴィッツの悪影響

大衆の存在

マスコミの発達によって大衆を無視することが出来なくなった。

むしろマスコミを通じて世論操作する必要が出てきた

工業化社会の産物→民族主義と結びついてデーモンのな力

物理的な破壊力→兵器のみなら無限に供給

大衆政党の形成：ドイツの社会民主党や中央党、イギリスの労働
党、フランスの社会党など

→彼らの協力が戦争遂行上不可欠となる

軍隊の大衆化

将校に占める貴族の低下と、大衆出身の将校の増加

政治エリートによる密室政治は不可能になっていた

理性ではなく感情が、打算ではなく倫理が行動を決定

→大衆の登場による「正義の戦争」

一旦動き出せば途中で止めることは不可能

とことんまで行き着くしかない

大衆自身、帝国＝世界の強国である事を支持

↓

帝国のもたらす利益に与る

民族の栄光・優秀性は戦争の勝利によって証明される
と信じていたし望んでいた